

# 小規模認可保育所 全国調査

## 3歳以降の受け皿 難題

昨年4月に始まった全国の小規模認可保育所に関して、3歳以降の受け皿の確保や、人員配置に困難を抱える施設が多いことが分かった。NPO法人全国小規模保育協議会（事務局・横浜市青葉区）が事業者を対象に実施したアンケートで明らかになった。同協議会は結果とともに意見書を国に提出し、改善を求めている。

（米本 良子）

調査は昨年10～11月に全国で小規模認可保育所を運営する事業者に対して実施。102事業者、148園から回答を得た（回答率24・8％）。

その結果、運営上の課題としては「早期・夜間の人員配置が難しい」（57％）「十分な人数の保育士・保育者を採用するのが難しい」（51％）など、人員確保に悩む声が多かった。

小規模保育所は以前から自治体独自の補助などを受けて柔軟な形で設置されてきたが、昨年4月に発足した子ども・子育て支援新制度に基づき、認可基準を満

たせば運営費補助が受けられるようになった。その一方で、平日11時間以上の保育や土曜開園なども定められたため、人員のやりくりがさらに難しくなっている。同協議会では分析している。

また「3歳以降の受け皿としての連携施設が見つからない」（50％）という意見も多かった。

小規模認可保育所の受け入れ対象は0～2歳児となっているため、新制度では卒園後の進級先として、保育所・幼稚園・認定こども園のいずれかと連携することになっているが、2011

9年度までは経過措置として、進級先を設定していない園も多い。現実的には待機児童が多い地域の認可保育所には3歳以降の募集枠

はほとんどなく、小規模認可保育所の半数は連携施設が見つからない状況だ。同協議会ではこれらの結果を踏まえて、1月に国の

### 横浜 綱渡り「自治体支援を」

東急田園都市線市が尾駅から徒歩3分のマンション1階。隣り合う2DKの部屋2室を改装してつなげた4室が、小規模認可保育所「りとる・ピッピ」の保育室だ。ダイニングキッチンでスプーンを温めたり、畳の部屋で赤ちゃんがくつろいだりと家庭的な雰囲気で、定員12人は常にほぼ満員だ。

同保育所が毎年、年度末になるとひやひやするものが、卒業する2歳児（定員5人）の受け皿だ。同じNPO法人が運営する近隣の認可保育所と連携している

子ども・子育て会議で意見書を提出。連携園確保に向けた自治体側の積極的な関与や、保育士以外の保育者の弾力的な活用などを要望している。

◆小規模認可保育園  
昨年4月からの子ども・子育て支援新制度で、市町村の認可事業（地域型保育事業）として新設した保育事業。0～2歳児対象、定員6～19人と小規模な施設の特徴を生かしてきめ細かい保育を行い、横浜市の家庭的保育事業などから移行した園もある。入所は認可保育園と同じく自治体に申請し、優先度の高い世帯から入所が決まる。

市家庭的保育事業として開設以来、毎年なんとか2歳児全員を保育所や預かり保育のある幼稚園などへ送り出してきたが、「綱渡り」状態が続いている。施設長の磯道静香さん（62）は「保護者に『3歳以降の預け先が見つからなかった子は今まではいい』としか言えないのが苦しい」と嘆く。実際に近隣区の小規模認可保育所では、今年も3歳以降の受け皿が見つからないケースが出ており、強い危機感を抱いている。

「小規模保育所も認可になったのだから、保護者が安心して子どもを預けられるためにも、3歳以降の受け皿が必ずあると言えるよう、自治体にも積極的に取り組んでほしい」と磯道さんは訴えている。



マンションの一室を改装し、家庭的な雰囲気での0～2歳児を保育する小規模認可保育所「りとる・ピッピ」  
—横浜市青葉区